

第6室

絵画一商山四皓・文王呂尚図屏風 展示解説

法隆寺の夢殿を中心とする東院伽藍は、僧行信によって天平年間（729～746）に建立されたもので、その後、法隆寺における太子信仰の拠点となっていた。その東院伽藍は、夢殿の背後に舍利殿（しゃりでん）・絵殿が一棟をなしており、さらに伝法堂が続いている。この舍利殿・絵殿は、元は一つの建物であったが、平安時代の延久元年（1069）に一棟の形を保ちながら東西に分けられ、中間に通路が造られた。西方は絵殿と呼ばれ、聖徳太子絵伝（国宝・N1）が障子絵として描かれ、東方は舍利殿となって太子関係の品々が納められていたようである。

現在の舍利殿・絵殿は、鎌倉時代の承久元年から二年（1219～1220）にかけて再建されたもので、南北朝時代には商山四皓・文王呂尚図が、舍利殿内部の須弥壇を囲む西・北・東の壁面に障子絵として嵌められた。

N4 商山四皓・文王呂尚図屏風

（しょうざんしこう・ぶんのうりょしょうずびょうぶ）

太子の掌中からこぼれ落ちたという舍利をはじめとする太子関係の品を納めた舍利殿の厨子が貞治3年（1364）に新造され、そのころ内部の改築も行なわれていることから、この図もほぼその時期に制作されたと推定されている。江戸時代、壁面よりはずされ、現在の屏風に改装されたが、その際に切り詰めと並べ違いが生じてしまっている。

向かって左3隻が文王呂尚図。呂尚は太公望の名で知られる人。釣り三昧の隠逸暮らしをしているところを、周の祖、文王に迎えられ、その子・武を助けて殷（いん）を滅ぼし天下を平定した。3隻のうち中隻と右隻の組み合わせに並べ違いがある。

右3隻は商山四皓図。中国・秦代に戦乱を避けて商山に隠遁していた髭（ひげ）も眉も白い四人の老高士（「皓」は「白い」の意）が、漢の高祖に迎えられて都に上り、国政を執った逸話が左から順に描かれる。

後世の補筆などもあるが、南北朝時代に遡る障壁画の現存例は少ないため、本屏風はきわめて貴重である。

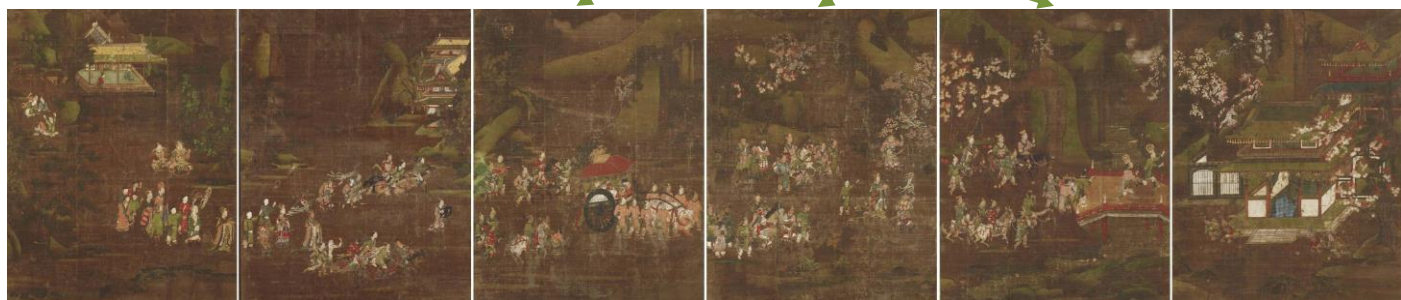
※裏面に続く

〔重要文化財〕 文王呂尚図

(現在の配列)



(本来の配列)



〔重要文化財〕 商山四皓図



第6室 染織—緋氈とさまざまな錦—

染織は古代のフエルトである緋氈とともに、さまざまな錦を展示しています。飛鳥時代から奈良時代にかけてわが国の染織は多様な発展を遂げ、美しい錦が次々と生まれました。今回はそのバリエーションの豊かさを概観してみたいと思います。

N-54-5 緋氈（ひせん）奈良時代・8世紀

「氈」とは、現在の絨毯（じゅうたん）のようなものです。正倉院に所蔵される氈は羊の毛で出来ていると報告されており、この氈も同様であると思われます。氈には素材本来の色を生かした白氈のほか、本作のように赤く染めた緋氈、様々な色に染めた毛で文様を表わした花氈（かせん）などがあります。現在でも西アジアやモンゴルなどの遊牧民が氈を使用しており、その素材も考慮すると、大陸との国際交流のなかではるばるもたらされたものと考えられます。

N-46-3-2 赤地山菱文錦裂（あかじやまびしもんきんぎれ）飛鳥時代・7世紀

古墳時代から飛鳥時代におけるわが国の錦は、色分けした複数の経糸（たていと）を浮き沈みさせることで文様を表わす経錦（たてにしき）が主流でしたが、緯糸（ぬきいと）を任意に浮かせた浮文錦（うきもんにしき）も一部で織られていました。この錦は浮文錦で、菱文や山道文（やまみちもん）などの小さな幾何学文を連続して表しています。

N-313-1：淡緑地輪繫文錦裂（うすみどりじわつなぎもんきんぎれ）奈良時代・8世紀

この錦は経錦で、大小2種類の円文の一部を少しずつ重ねてつなぎ、内部にも様々な文様を納めた複雑な構成をとっています。経錦は経糸に3色程度の色糸を用いる場合が多いなかで、この輪繫文錦はなんと6色も使っており、高い技術力を示しています。

I-336-57 赤地鳥獣連珠円文錦（あかじちょうじゅうれんじゅえんもんにしき）

飛鳥～奈良時代・7～8世紀

遠目には縞柄のように見えますが、連珠円文を表わした主文の三分の一くらいが見えるでしょうか。同じ文様をあらわした別の作品から連珠円文のなかには向かい合う動物の文様がおさめられ、副文は小さな連珠円文を中心として、四方から噴出すようにパルメット文を配していたことがわかります。

*裏面につづく

I-336-58 濃茶地双鳳連珠円文錦（こいちゃじそうほうれんじゅえんもんにしき）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

経錦の残欠。主文（しゅもん - 文様の主な部分）は向かい合う鳳凰と植物の文様を収めた連珠円文であり、副文（ふくもん）は中心に六弁花を置き、その四方には吹き上がるようにパルメット（ナツマヤシの葉をモチーフとした文様）が配されています。

I-336-59 茶紫地小花目結襷文錦（ちゃむらさきじしょうかめゆいたすきもんにしき）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

小さな目結文（めゆいもん - 小さな輪を連続させた文様）で襷文（たすきもん）を表わし、その中に八弁の花文を収めています。赤と緑、二種類の星のような花が可愛らしさを感じさせる経錦です。

I-336-60 茶紫地亀甲繫花葉文錦（ちゃむらさきじきっこうつなぎかようもんにしき）

飛鳥～奈良時代・7～8 世紀

うっすらと縞柄のように見えるのは、経糸を染め分けて文様を表わした経錦の特徴です。ここでは枠のなかに連珠を収めた六角形を亀甲のようにつなぎ、その中に先端がとがった四弁花文を収めています。

I-336-67 青緑地六弁花鳥文錦（あおみどりじろくべんかちょうもんにしき）

奈良時代・8 世紀

奈良時代に織られた経錦の残欠です。文様には花や鳥が緻密かつ具象的に表現されており、技術の発展をみることができます。よくみると花のまわりには鳥が連なるように表わされており、平安時代以降、宮廷装束（きゅうていしょうぞく）のなかで多様される鳥襷（とりだすき）文様に先行する作例と捉えることができます。

I-336-72 黄地唐花文錦（きじからはなもんにしき） 奈良時代・8 世紀

かなり褪色するものの、複雑に表わされた華麗な花文様をみることができます。これは唐時代の中国で流行した文様で、わが国では唐花（からはな）と呼んでいます。隋から唐代に中国でおきた技術革新にともない、奈良時代以降、わが国の錦は本作のような緯錦によって変わります。本作は技術・文様ともに奈良時代の最新技術を反映したものと言えるでしょう。